

俳句雜誌

空

空

平成30年10月31日発行

第16巻5号

通巻第81号



2018・10・11

SORA 81号

穂絮吹く

柴田佐知子

雲を踏むごとき歩みや生身魂

生身魂骨折り畳むやうに座す

蛸壺の乾ききつたる孟蘭盆会

白髪の吹き散らさるる川施餓鬼

庖丁のどれも短し西瓜切る

振向くとまだ螻蛄の構へをり

朝顔の形整へつつひらく

杖をつく母に秋の蚊ついて来し

庖丁の露店しづかな放生会

苛立ちの脚に見えくる祭馬

秋祭妖しき神も祀られて

うつらうつらと敬老の日も母は

月を待つ赤子をまるく抱き直し

入院の母の方へと穂絮吹く

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

水口に草のつまりし植田かな

香水の空瓶捨てず髪染めに

黒南風や島に小さき船溜り

皆髪を染めて来し旅さくらんぼ

羽抜鶏同じ所で折り返す

麦笛を捨てたる里も変りけり

日焼の子裏返したるやうに寝る

廃屋に溢れて垂るる凌霄花

立ち上る波を大きく飾り山笠

蛇付の納屋と売られし田んぼ神

吊られたる筈に釣銭夏祭

捨鶏舎の中まで進む夏の草

窮屈な夢を見てゐる熱帯夜

蒲の穂を掲げ人ごゑ探しけり

夜のプール自由な体とり戻す

麦秋や送り来し子とハイタッチ

福岡 柴川志津子

熊崎 荒井千佐代

昼寝より幾度覚めても病衣なり

月下美人にしばらく客を預けたり

夜も鳴いてもあまさるる羽抜鶏

被爆校舎櫺若葉の隙間より

放生会射的の的の廻りをり

松は松の形に倦みて夏うぐひす

ふるさとや稲刈つて山近くなる

めまとひや六十路終りの眉の辺を

灘の風真直ぐに来る刈田かな

薔薇の昼兎への粥を助手席に

断罪の島の明るき花すすき

紫陽花に立つエプロンを付けしまま

それぞれの色に暮れゆく紅葉山

延命のチューブ十本夏深む

混浴へ道ほの暗しきりぎりす

逝くや夜を庭の駄蟬の鳴き継げる

埼玉 服部 早苗

一切は蚕豆むいてからのこと

野火止の流れに浮名業平忌

寝違ひの首もて茅の輪くぐりけり

ベストの背蛍光したる夜釣人

寄りかかる場所のひとつに冷蔵庫

レース手袋指一本づつはづす

陶枕にありなだらかな山と谷

暗転のうつすらと浮く軽羅かな

福岡 岸 洋子

九十をかるく生きたし糸とんぼ

爪を切る音日盛りの奥の部屋

火を使はぬものばかり食べ暑に耐ふる

梅雨上りさうビタミン剤ふやす

見ゆる老い見えざる老いや新茶汲む

息せききつて走る夢覚む熱帯夜

百歳を覗いてみたし箱眼鏡

しあはせといへば幸せ夕端居

北九州 深川 淑枝

広島 戸栗 末廣

足をもて足洗ひゐる帰省かな

岩清水ごくりと緑ひろごりぬ

雲を追ふ雲のまぶしき麦の飯

しばらくはリユツクを岩に閑古鳥

山の端に雲吹きたまる青葡萄

草いろの波打ち寄する蚊遣香

祭来と縁しろがねの海の雲

月の出の木曾山中に踊りけり

どの家も夕炊きのころ立葵

炎天の消したる河原雀かな

燐寸消え甘き香のこる夏の雨

河骨のぽつかり二つ三つかな

井戸水に砂まじりくる早星

女郎蜘蛛送電塔に糸を吐く

夜の木々に雨の音せる新茶かな

海の日顔つけて呑む山の水

福岡 角野良生

カルデラの隅なく晴れて田水張る

踏切を渡り切つたる毛虫かな

万緑のダム万緑へ放水す

蛇の衣にも眼力のやうなもの

炒り胡麻の八方に跳ね梅雨あがる

金色はものふの色飾り山笠

追善山笠遺影も同じ水法被

折り目よりちぎるる地図や青山河



北九州 河原敬子

白日傘明日香歩くは恋に似て
緑蔭や瀬音のなかの相聞歌
磐座の風を通せる簾かな
山頂の墓に箒目ほととぎす
記紀の代も同じ山容大西日

福岡 山内碧

代替はりして変はらざる植田かな
重機置く夏野に道の尽きにけり
浮輪つけ座敷の海を転がりぬ
蚊帳吊りし五寸釘ごと家古ぶ
螢火は黄泉の標や更に追ふ

大野城 森田明成

ふるさとの氏子少なき祭かな
外ばかり見てゐる病衣夏の月
冷飯も饅飯もなし飢ゑもなし
片陰の続かぬ里を歩きけり
擦傷にヨーチン塗りて夏終る

岡垣 田中とし江

新生児室の心音みどりの夜
藻刈舟ゆたかに水の流れ去る
鉄橋をはみだす轟音日の盛り
山鉾の赤を力に綱を引く
祭の子祭衣装のまま遊ぶ

太宰府 山本 則男

口中のくれなゐ強し鴉の子
青大将去りて一村亡びゆく
不揃ひの椅子並べあり海の家
連絡船水母を分けて着きにけり
巡り来るものに押さるる走馬燈

熊本 松田 明子

長女には長女の務め桐の花
目を剥きて蜻蛉返りの睦五郎
火口へと御幣投げ込む開山祭
右往左往して舟虫の一生(ひとよ)
かな

須恵 苑 実耶

夕刻を紡ぎて烏瓜の花
賑はへる限界集落盃蘭盆会
鶏頭やあちこち軋む母の家
盆綱に引き摺られたる膝の傷
一日を眠るばかりの父に梨

福岡 栗原 京子

鶏頭や縁側に梳く母の髪
噴火せし山からの風冷素麺
武者人形三種の神器取り揃へ
篝火の陣屋を構へ武者人形
灰かぶる夏みかんすぐ工場へ

大阪 井上 和子

沢蟹の鍋をのがれて飼はれをり
睫毛なき鳥の眼光る青葉冷
パンドラの箱を開けよと青葉木菟
眼白の巢卵が一つ減つてゐる
巢隠の眼白いまにも飛ぶ構へ

千葉 原 友子

校庭の青大将を囲みけり
雲潜るたびの明るさ梅雨の月
刃を入れし南瓜に熱き腸のあり
ステテコや口に合はざる貰ひもの
酔ひ易き父となりけり走馬灯

直方 石橋 幾代

青ふくべ妙案ふつと浮かびけり
見つめすぎ暗くなりたる蟻地獄
青空の張りつめてゐる野分前
現し世をふんはりつつむ夕螢
魚の血の残るまな板梅雨深し

太宰府 西住三恵子

磨かれし神馬を裾に雲の峰
山国や早乙女の眼のうすみどり
生きてゐる足裏のしびれ沙羅の花
友と寄る緑雨の中のレストラン
清道に朝の湿りや山笠駆くる

長崎 仲里 奈央

夏まつり振り向きざまの博多弁
ほうたるを来世も共に見たき人

蟬時雨抜けて風吹く処あり

夜濯ぎの間に妥協点探しをり

夕蟬や振り向かぬ子の目に涙

京都 天谷 翔子

秒針のやけに気になる熱帯夜

青嵐盲導犬は顔を上げ

噴水や男神女神の裸身なる

祭笛小さく振つてまた吹きぬ

白日夢だつたか舟虫の消えて

粕屋 吉田 穂

箱庭に空を見上ぐる人ひとり

一陣の風にたわみし作り雨

傷癒すために本読む立葵

螢狩宿に降り籠められてをり

河童忌のごとんと落つる夕日かな

直方 曾根 富久恵

八月や逆さまに見る日本地図

麦秋や平らな魚に裏表

土偶にも似て豊満な紫陽花は

母の居る彼の世は近し青簾

避難所に猫と一夜を大出水